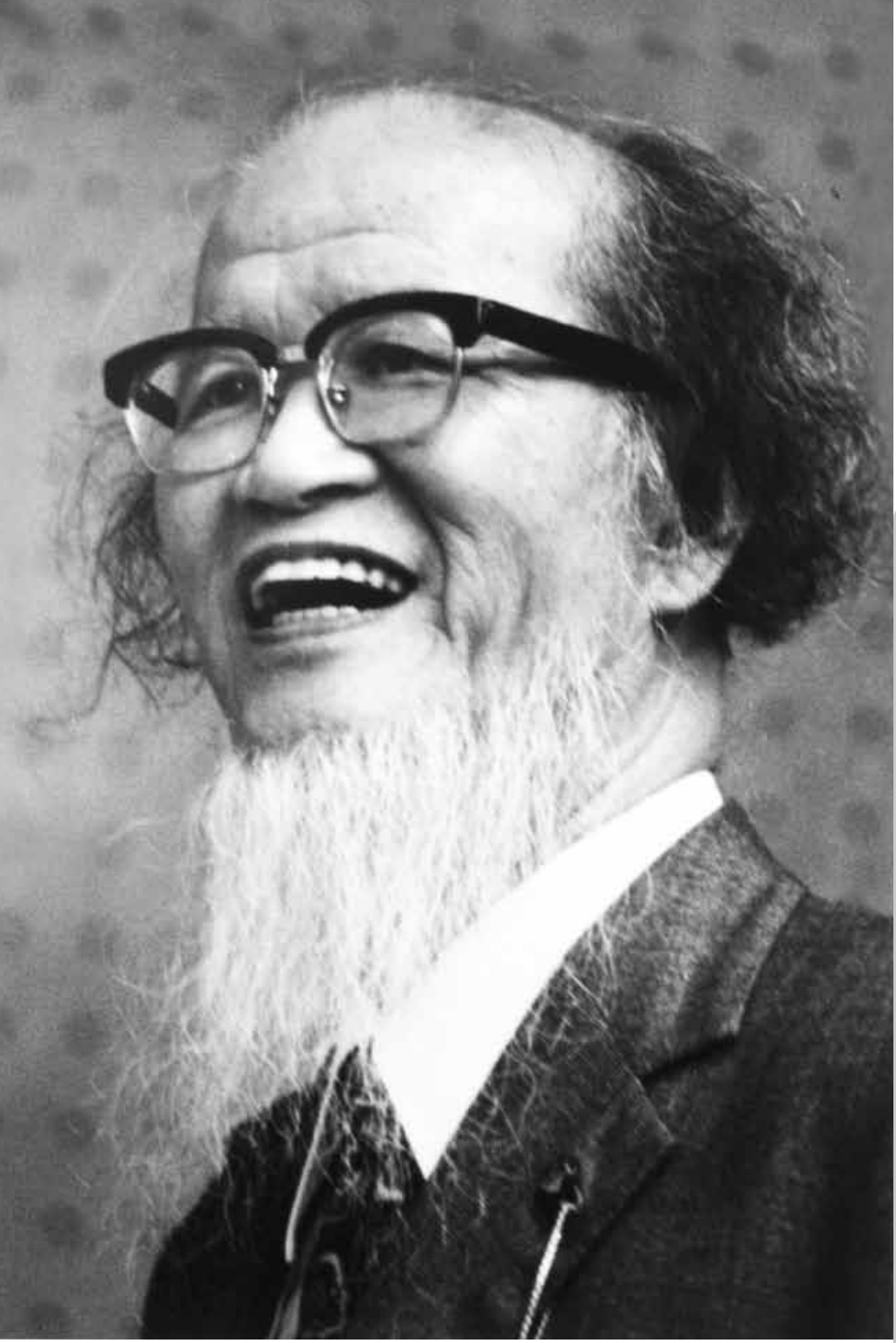

YAMAGA

近代の山鹿の偉人たちシリーズ 019

京都産業大学を創設（一八九七～一九七八）

荒木俊馬

京都産業大学の創設者。俊馬は、京都帝国大学時代、講演したアインシュタイン博士に、学生総代としてドイツ語で歓迎の辞を述べ、理学部教授のときには、湯川秀樹や朝永振一郎らにせがまれ、量子力学の集中講義を行った。文部省派遣でヨーロッパに留学し、アインシュタイン博士など世界最先端の科学者に学び、帰国後は、日本の宇宙物理学の第一人者といわれるようになる。敗戦後すぐに京都帝国大学教授を辞職し、山村の開懇地に隠棲。子ども向けに幾つもの本を書き、その中の『大宇宙の旅』は、「銀河鉄道999」や「宇宙戦艦ヤマト」で知られる松本零士に、少年時代大きな影響を与えた。

昭和三十七年、日本の将来を憂い、新しい大学を創ろうと決意。東奔西走し、昭和四十年、京都産業大学を創設。初代の学長兼理事長となり、後に初代の総長に就く。ポーランド国最高功労十字勲章を受章。

生い立ち

荒木俊馬は、明治三十年(一八九七)三月二十日、熊本県鹿本郡鹿本町(現、山鹿市鹿本町)来民で、父竹次郎、母記寿の長男として生まれました。近くには、大正十三年(一九二四)熊本県初の総理大臣となる清浦奎吾伯爵が生まれた明照寺がありました。

父の竹次郎は、東京高等師範学校に学び、明治二十九年(一八九六)に熊本に戻り、濟々黌の城北分黌(鹿本町来民)の主任を務め、その後、城北分黌が県立鹿本中学校に昇格したときに、初代の校長となりました。

明治三十九年(一九〇六)、竹次郎は、恩師の東京高等師範学校長嘉納治五郎(柔道の創始者)に、東京で中国人留学生に教育指導をして欲しいと強く頼まれ、県立鹿本中学校を退職し、上京しました。そのため母記寿は、来民尋常小学校に入学していた俊馬と幼い千里と亨の三人の子どもを連れて、熊本市の新屋敷に転居、俊馬は熊本市立碩台小学校に転校しました。

未来の熊本の秀才・荒木三兄弟、左から千里、俊馬、享

しかし、翌年(一九〇七)、俊馬が十歳のとき、父竹次郎(三十九歳)が旅先の愛知県で急死しました。母は子どもたちを育てるため碩台幼稚園の教師となって働き始めました。

俊馬は、小学校を卒業し中学を受験しましたが不合格でした。熊本高等小学校に通い、再挑戦して明治四十三年(一九一〇)に熊本県立中学濟々黌(現、県立濟々黌高等学校)に入学しました。

入学したものの、二年生のときはビリから二番目でした。成績の悪い順から前の席に座らされていたので、席は最前列でしたが、その後徐々に成績も上がり、卒業するころには一番後ろの「壁付き」の名誉の席を占めました。特に数学や物理がよくできました。

濟々黌で五年間学び、大正四年(一九一五)に卒業し、広島高等師範学校の理科一部に入学。四年間学んだ後、大正八年(一九一九)に卒業し、滋賀県立彦根中学校の教師になりましたが、その翌年に教師を辞め、京都帝国大学(現、京都大学)理学部物理学科を受験し、合格しました。

京都帝国大学時代

大正十年(一九二一)、京都帝国大学教授の新城新蔵博士が、ドイツ留学によって、世界最先端の天文学、物理学の知識を吸収して帰国し、宇宙物理学教室を新設しました。俊馬は、広島高等師範学校に学んでいた頃から天文学に関心があり、宇宙物理学教室に移りたいと思い新城教授を訪ねました。俊馬は、新城教授と会って、「この方こそ、私の師事する方だ」「これから一生、天文学をやっていこう」と心に決めました。

大正十一年(一九二二)十一月、相対性理論によって世界的に有名な科学者となっていたアインシュタイン博士が来日しました。東京帝国大学(現、東京大学)で、日本の物理学者や優れた学生たちのために、六回にわたって特別講義が開かれ、新城教授は京都帝国大学からただ一人俊馬を連れて参加しました。

この後、十二月十四日に京都帝国大学でもアインシュタイン博士の講演会が行われました。俊馬は、学生総代としてドイツ語で歓迎の言葉を述べました。

大正十二年(一九二三)に大学を卒業。そのまま理学部講師とし

て大学に残り、翌年に助教授となり、新城教授の娘京子と結婚しました。

大正十四年(一九二五)の三月二十日の午前〇時三分に、長男の雄豪が生まれました。俊馬は、自分と同じ月日に長男が生まれたことに感動を覚え非常に喜びました。午前三時ごろ自宅に帰り、わが子誕生の興奮でほとんど寝ていなかった俊馬は、夜明けを待って、モーニングを着こみ、病院へ出かけました。父子の初対面は厳粛なものであると考えたからでした。

雄豪は、後に、父俊馬が教えていた京都帝国大学宇宙物理学科に進みました。

昭和三年(一九二八)、俊馬は、「天体力学」の講義終了後の夏休みに、「量子力学」の講義を十五回にわたって集中して行いました。

後にノーベル賞を受けた湯川秀樹博士と朝永振一郎博士がまだ物理学科の学生だった頃で、学生らが俊馬に頼んで当時としては最新の「量子力学」の講義をやってもらいました。

岩波書店の『図書』(昭和五十七年(一九八二)出版)に「ふたりが学生だったころ」として湯川秀樹博士と朝永振一郎博士の対談が掲載されています。その中で、湯川博士が「私が三年生のときで、荒木助教授は新進気鋭。ちょうど量子力学が現れたときで非常に印象が強かった」と言うと、朝永博士が「名講義だった。僕も印象に残っている」と返し、湯川博士が「なかなかロマンチックにおやりになる。それで僕らを大いにアジったわけやね。そのときから量子力学をずっとやるつもりだったから」と語っています。

京都帝国大学助教授時代の俊馬

ヨーロッパ留学

昭和四年(一九二九)一月、俊馬(三十一歳)は、文部省派遣の海外研究員として、神戸港から日本の客船鹿島丸でヨーロッパ留学に向かいました。そのころ、日本から海外に行くには、船しかなく、日本からヨーロッパまで四十日ほどかかっていました。

俊馬は、二月下旬にヨーロッパに着き、イタリアのナポリに三週間ほど滞在。素晴らしい語学の才能を持っていた俊馬は、下宿生活を始めて二週間経ったころには「イタリア語で大体しゃべることができるし、人の言うことを大胆に聞き流すことができる」と妻への手紙に書いています。

四月、ドイツのベルリンに着いた俊馬は、聞きなれないドイツ語にとまどい、あわてました。「ドイツ語の発音が、日本でやってきたのと全然違う」。京都帝国大学の学生、教官時代の勉強を通して、ドイツ語の論文は不自由なく読み書きできました。

ドイツ語会話学校に通い、九月、ベルリン大学の新学期が始まり、研究生活がスタートする頃には、「なにげなくドイツ語でこの国の人たちと会話している自分に気づく」ようになっていました。

俊馬は、日本を出発する前に、京都帝国大学に「セフェイド変光星の大気圏の圧力変化に関する高温電離の理論による研究」という博士論文を提出していました。七月にその論文が認められ、博士号を授与されることが決まりました。当時の日本では「末は博士か大臣か」と立身出世の目標とされていた時代です。お祝いの電報や手紙がたくさん自宅や大学の研究室に届きました。俊馬は、ドイツのベルリンの下宿先に届いた妻京子からの手紙で、博士論文が通ったことを知りました。俊馬は非常に喜び、ベヒシュタインのピアノを購入し、京都にいる妻子に送りました。ベヒ

シュタインピアノは「ピアノのストラディバリウス」といわれるほどの名器で、戦前の日本では最高のピアノの代名詞ともなっていました。

俊馬は、ベルリン大学とポツダムの天体物理研究所で二年にわたる研究生活を送りました。ドイツにはアインシュタイン博士や物理学の最先端をいく優秀な学者たちが集まっていて、俊馬は相対性原理や量子力学の理論について研究を深めました。

その一方では、オペラ座にもよく通い、また、いろいろなところへ旅行に行き、スイスのアルプスの山歩きも楽しんだりしました。俊馬は、子どもの頃から非常に絵が上手で、旅先ではスケッチをよく描きました。また、旅先からは妻の京子あてに一七〇〇通ものたくさんの絵はがきを出しています。

帰国

昭和六年(一九三一)、俊馬は、二年間のヨーロッパ留学を終え、シベリア鉄道を利用して日本に帰って来ました。翌年、京都帝国大学の宇宙物理学第一講座を分担することになりました。また、外国の書物を原文で読むために再びロシア語の勉強を始め、翌年には中国語の勉強もしました。

昭和九年(一九三四)一月、皆既日食を観測するため、日本が統治していた南洋諸島のローソップ島へ、大掛かりな観測隊が日本から派遣されました。隊員は、俊馬をはじめ、海軍技術研究所、逓信省(郵便や通信を管轄する省庁)、東京天文台、東京帝国大学などの当時の一流の天文、宇宙物理学者たちでした。

昭和十年(一九三五)、新城博士は、中国の上海自然科学研究所長として、中国に渡りました。翌十一年(一九三六)、俊馬は皆既日食観測のため中国に行き、新城博士と共に観測を行いました。しかし、残念なことにこの二年後の昭和十三年(一九三八)に新城博士は中国の南京で亡くなりました。

昭和十六年(一九四一)、四十四歳の俊馬は、京都帝国大学理学部の教授となりました。この年の十二月八日、日本がハワイの真珠湾を攻撃し太平洋戦争が始まりました。

夜久野村へ

昭和二十年(一九四五)八月十五日、日本はアメリカなど連合国側に降伏し、戦争が終わりました。

俊馬は「戦争を始めた以上、祖国を守るためには勝たなければならない」と、大日本言論報国会の理事を務め、軍部に協力していました。

日本が負けたことは俊馬にとって「驚天動地の驚き」であり、その夜は一睡もせずに、これからどうするか思い考えました。

「占領軍がまもなく進駐するであろう。日本の官吏はすべてその指揮を受ける。いままで戦ってきた占領軍の禄を食むつもりは毛頭ない。ではどうするか。官職を捨てるか、それとも屈辱を忍んで大学教授のポストにしがみつくか」

考えた末に、俊馬は山村に籠り、晴耕雨読し、家族とともにわが人生のこれからの生き方を考えたいと決心しました。

終戦から九日目の八月二十四日、俊馬は、辞表を大学に提出しました。

兵庫県境に近い京都府天田郡夜久野村(現、福知山市夜久野町)で開墾の仕事をし、終戦の翌日に友人と俊馬を訪ねてきた菱沼政雄を頼って、家族とともに夜久野村へ移りました。

俊馬は、夜久野村で畑を借り開墾生活を始めました。最初に住んだのはスイカ小屋でした。板敷にコモを敷いた、吹きさらしの粗末な小屋でした。長女みそらと三男の俊豪は小学生で、みほし、靖豪はまだ幼児でした。長男の雄豪は京都帝国大学学生で、馬術

部に所属し、馬小屋で寝泊まりしていました。

しばらくして、川のほとりに家を借りることができました。冬はインクも凍りつくほどの寒さでしたが、夏になるとたくさんのホタルが舞うのを見ることができました。

俊馬は、畑仕事に従事しながら三人の子どもたちに数学やピアノなどを教え、夜は文学から専門書まで幅広く本を読み、特に哲学書を熱心に読みました。

夜久野で子どもたちと。自給自足、晴耕雨読の日々を送る

また、子どもたち向けに、『大宇宙の旅』や「楽しい理科教室」シリーズ『昼夜の長さと季節』『黄道をさまよう天体』『日食と月食』など宇宙の神秘についての本を次々に書きました。

有名な『銀河鉄道999』や『宇宙戦艦ヤマト』を書いた漫画家松本零士は、小学六年のときに『大宇宙の旅』を読んで、宇宙への眼が開かれたそうです。松本零士は平成十三年春に、「私に大宇宙という名の未来をさずけて下さった大恩師、偉大な荒木先生に心から感謝しています」と書いた色紙を京都産業大学に送っています。

月日が経つうちに、俊馬が天文学や宇宙物理学の学者で、京都帝国大学の教授だったということが周りに知られ、文化人が集まり、講演の依頼も次々に来て、俊馬の教育に対する熱い思いが広く知られるようになりました。

昭和二十七年(一九五二)、地元の人たちから熱心に頼まれ、夜久野教育事務組合の教育委員長になりました。

昭和二十九年(一九五四)、俊馬のかつての教え子たちが、俊馬先生をこのままにしておくのはもったいない、優れた人格識見を今こそこの世にいかすべきという声が強まり、三月、俊馬は家族とともに夜久野村から京都に戻り、私立大谷大学教授の職に就きました。

昭和三十二年(一九五七)には、以前勤めていた京都大学(戦後、学制改革により名称変更)の理学部と大学院の講義にも戻ることができました。

新しい大学を

俊馬は、日本の国が大切に持ち続けて来た「美しい歴史的伝統を基盤にした心」が消えようとしていると感じ、さらに、教育現場の混乱を見て、「大学が今のままであれば、日本は滅びる」と心を痛め、国の将来を憂う気持ちが高まり、日本の将来を背負う人材育成のための大学を造ろうと、昭和三十七年(一九六二)の秋、動き出しました。

俊馬は、日本の将来のために自分の理想とする新しい大学を創設することの必要性を、寝食も忘れ忙しく説いて回り、土地探しに奔走しました。

京都府のある議員から、土地を提供し全面的に協力するのでぜひ自分のところに大学を造ってほしいという話がありましたが、金儲けしようという人たちがからんできたため、やむを得ず断念しました。

俊馬は、国有林に目を付けました。林野庁の理解と協力を得て、三十八年(一九六三)の初夏、京都府内の国有林を一つ一つ見て回り、八月二十一日、本山十三区国有林に大学を建設しようと決めました。

土地の次は建設するための資金集めに奔走しました。大谷大学

の退職金や自身の思い出の品々を売って得たお金を資金としてつぎ込みました。俊馬が資金集めに苦労していることを知った、かつての教え子や知人友人たちから浄財が寄せられるようになりました。

このころ、日本は高度経済成長時代に入り、十八歳人口が増え、進学率も急上昇し、私立大学、短大が次々に誕生していました。大学建設を考えていた京都の東山学園の藤原弘道学園長が、俊馬の熱い思いと緻密な計画に深い理解を示し、全面的な支援を約束しました。

大学を新しく造るためには、土地や資金だけでなく建設工事、教授集めなど非常に難しい問題がたくさんありましたが、俊馬はたくさんの人たちの協力と支援によって、遂に昭和三十九年(一九六四)十二月十八日、文部省の大学設置の認可(内定)をもらうことができました。(正式認可は翌年一月二十五日)

京都産業大学の開設

大学の名称は京都産業大学に決定し、昭和四十年(一九六五)四月、俊馬は京都産業大学の初代の学長兼理事長となり、経済学部経済学科、理学部数学科、物理学科の二学部三学科で大学が開学しました。俊馬は、経済大国として成長し続けている日本の国の将来を担う経済人、独創的な科学者、技術者の育成をめざしました。

募集期間が三ヵ月もなかったにもかかわらず、予想もしなかった受験者数があり、期待を上回る六百九十七名もの入学者を迎えることができました。

父俊馬と一緒に大学創設に関わり、開学とともに移ってきて理学部教授となった長男の雄豪は、すぐに馬術部を作りました。雄豪は、京都帝国大学の学生のときから馬術の名手として国内外で活躍し、五年前のローマオリンピックにも出場していました。馬術部は、雄豪の名指導により、すぐに全国大会で優勝するなどして、またたくまに日本の学生馬術界の頂点に駆け上がりました。

できたばかりの京都産業大学は、教職員と学生が一体となって、理想の総合大学を自分たちの手で創り上げようという意気に燃えていました。

俊馬は、教育と研究施設の充実に力を入れました。特に、コンピュータの導入については、国内の大学の最先端を行く充実ぶりで、関西の他の私立大学より十年先を行くものでした。

また、学生たちのために、毎年のように世界的に有名な学者を大学に招き、講演をしてもらいました。

昭和四十二年(一九六七)十一月、歴史学者として世界の最高権威だったアーノルド・トインビー博士を招きました。その後、有名なハーマン・カーン博士も招き講演会を開きました。この偉大な二人の学者には大学の学事顧問になってもらいました。

京都産業大学に着いたトインビー博士夫妻。熱い拍手に迎えられた

昭和四十六年(一九七一)七月から十月にかけて、俊馬は、世界交流の地ならしの目的でヨーロッパからアメリカを回りました。イギリスではトインビー博士の自宅を訪ね、懐かしい再会を果たしました。

昭和四十八年(一九七三)の秋、俊

馬は、ポーランドで開催されたコペルニクス生誕五〇〇年記念の会議に招待を受け、記念講演をしました。

昭和五十一年(一九七六)五月、俊馬は、前の年に亡くなったトインビー博士の墓参りのためイギリスに行きました。

京都帝国大学医学部教授となり脳外科学の第一人者とまで言われていた弟の千里が、七月二日、亡くなりました。俊馬は、昭和二十五年に末の弟亨も亡くしていました。

同じ昭和五十一年、俊馬は、ポーランドから最高功労十字勲章を授与されました。

昭和五十三年(一九七八)七月十日、俊馬は、いつものように大学に出勤。大学総長となっていた俊馬は自分の部屋で仕事をし、副総長や理事たちと歓談しながら昼食を食べ、午後、元気に自宅に帰りました。しかし、その夕方、急性心不全を起こし、午後七時、息を引き取りました。八十一歳でした。

七月二十二日、京都の相国寺で大学葬が行われ、約三千人もの人たちが参列し、俊馬の死を悲しみました。

お墓は、相国寺塔頭、大光明寺にある弟千里の隣に建てられました。

その後、京都産業大学はめざましい発展をし、現在では一万三千名の学生が学ぶ総合大学となっています。

平成二十年(二〇〇八)十月には、京都産業大学の益川敏英教授が、ノーベル物理学賞を受賞しました。なお、平成二十二年(二〇一〇)三月十三日には、益川教授が山鹿市に来られ、中高生のために八千代座で講演されました。

また、平成二十三年(二〇一一)七月から二か月間、熊本近代文学館で、熊本近代文学館特別展「大宇宙の旅　荒木俊馬展」が開催され、たくさんの人が見学に訪れました。

熊本近代文学館特別展のチラシ

京都産業大学のキャンパス（平成２２年４月撮影）

京都産業大学を創設
荒木 俊馬
TOSHIMA ARAKI 1897～1978

年表 History

明治三十年（一八九七）▼熊本県鹿本郡鹿本町（現、山鹿市鹿本町）で、父竹次郎、母記寿の長男として生まれる

明治三六年（一九〇三）▼来民尋常小学校入学

明治三九年（一九〇六）▼熊本市立碩台小学校に転校

明治四十年（一九〇七）▼碩台小学校卒業。父竹次郎急死

明治四三年（一九一〇）▼熊本県立中学濟々黌に入学

大正四年（一九一五）▼濟々黌卒業。広島高等師範学校理科二部入学

大正八年（一九一九）▼広島高等師範学校卒業。滋賀県立彦根中学校教諭に採用

大正九年（一九二〇）▼彦根中学校を休職し、京都帝国大学理学部物理学科に入学

大正十年（一九二一）▼物理学科から宇宙物理学科へ転科

大正十二年（一九二三）▼京都帝国大学を卒業。同大学の理学部講師に

大正十三年（一九二四）▼恩師の新城教授の娘京子と結婚。京都帝国大学理学部の助教授になる

昭和四年（一九二九）▼文部省の海外研究員としてドイツに留学。京都帝国大学より理学博士号を授与される

昭和六年（一九三一）▼二年間のドイツ留学を終え、帰国

昭和七年（一九三二）▼京都帝国大学理学部宇宙物理学第一講座分担

昭和九年（一九三四）▼ローソップ島で皆既日食を観測

昭和十一年（一九三六）▼中国で皆既日食を観測

昭和十三年（一九三八）▼義父の新城博士が中国の南京で急死

昭和十四年（一九三九）▼中華民国行政院文物保管委員会顧問。中国の南京の紫金山天文台復旧を指導

昭和十五年（一九四〇）▼日本学術会議天文学・物理学研究会議委員

昭和十六年（一九四一）▼京都帝国大学理学部の教授になる。日本学術振興会委員。中国の漢口で皆既日食を観測。十二月八日、太平洋戦争

昭和十八年（一九四三）▼京都第三高等学校の講師を兼務。大日本言論報国会評議員

昭和十九年（一九四四）▼京都府中等学校理数科物象教員臨時養成所の所長兼務。京都帝国大学評議員

昭和二十年（一九四五）▼大日本言論報国会理事。八月十五日、終戦。京都帝国大学を辞職し、夜久野村へ隠棲

昭和二二年（一九四七）▼公職追放

昭和二六年（一九五一）▼公職追放解除

昭和二七年（一九五二）▼夜久野教育事務組合教育委員長

昭和二八年（一九五三）▼大阪商業大学出講

昭和二九年（一九五四）▼京都へ戻る。大谷大学教授

昭和三二年（一九五七）▼京都大学理学部、同大学院出講

昭和三九年（一九六四）▼大谷大学退職。日本天文学会名誉会員

昭和四十年（一九六五）▼京都産業大学が開学。初代学長兼理事長に

昭和四二年（一九六七）▼台湾やヨーロッパへ出張。トインビー博士来学、講演

昭和四四年（一九六九）▼京都産業大学の初代総長に。同大学の第一回卒業式

昭和四八年（一九七三）▼コペルニクス生誕五〇〇年記念事業でポーランドへ招待され、講演する

昭和四九年（一九七四）▼京都大学名誉教授

昭和五一年（一九七六）▼ポーランドの最高功労十字勲章を受章

昭和五三年（一九七八）▼七月十日、自宅で、急性心不全のため逝去。享年八十一歳。七月二十二日、大学葬

近代の山鹿の偉人たち 019
京都産業大学を創設 荒木 俊馬

平成 24 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課
〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿 156-3
TEL 0968 - 43 - 1691

執筆
岩井 賢太

参考文献・ご協力頂いた方（敬称略）
『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学』(学校法人京都産業大学)
『異風者伝 近代熊本の人物群像』井上智重(著)
京都産業大学 大学史編纂室 白本正二